

報 告

平成6年度附属図書館展示会「吉田松陰とその同志」 および電子版展示会報告

附属図書館では、平成6年9月26日（月）から10月28日（金）まで、日曜・祝日を除く28日間にわたって、本館展示ホールにて平成6年度展示会を開催しました。今回は、本館の所蔵する維新特別資料文庫（「尊攘堂」資料）の中から、松陰を中心として彼に関連深い人物たちの遺墨を主に展示しました。折しも平安建都1200年にあたり、本学文学部博物館においても同文庫にテーマを得た企画展が行われ、それとの連携を図ること、また、電子図書館のデモンストレーションを兼ねた電子版展示会を試みるなど、新たな趣向が加わったこともあり、異例の長期開催となりました。

(1) 展示会は概ね好評で、合計1664人の入場者がありました。およそ半数が学外からの参観者であり、平日に比べると土曜日の方が4割程多く訪れていました。なお、期間についてはこのくらいでよいという意見が主流でした。開催情報の入手先として目立つのは、順に学内ポスター、看板、新聞などでしたが、もっと宣伝を、という声も数多くありました。

では、アンケートの結果を参考にして、観覧状況を具体的にみていきたいと思います。

注目を集めた展示物を順にいくつか挙げていきますと、「尊攘堂所蔵写真」「松陰画像」「鉄石書状」「松陰獄中書簡」「高杉七絶」「象山山水画」などとなります。やはり視覚に訴えるものが好まれるようです。テーマが比較的親しみやすいものであるためか、生の資料に触れ得た喜びや感動を素直に表現した感想が多く見受けられました。「書跡・書体から志士の人柄や性格までわかるようで感激した」「当時の世相・雰囲気伝わってくるようでよかった」といった感想からは、歴史の中に消えていった有名・無名の志士たちの奔走振りに思いを馳せたであろう様子がうかがえます。なかには、このような貴重な資料が所蔵されている事を初めて知ったという驚きを述べる方も少なくありませんでした。しかしながら、史・資料的価値を称揚する意見がある一方で、資料の取扱い（展示環境を含めて）の粗雑さを指摘する意見も見られました。

解説については、簡潔でわかりやすいと述べる方が比較的多いものの、対訳や書き下し文、活字にしたものなどを添えてほしかった、という要望の強さ

からは、展示資料をより深く味わいたいという熱心な姿勢を改めて知ることができました。

パネルや展示方法をもっと分かりやすく、という意見も少なくなく、人物や資料相互の関連を時代経過と結び付けるなどして、立体的かつグラフィカルに表現するような工夫も必要だったといえるでしょう。なお、今回は、従来の図録に代わってポストカードを作成しましたが、これについてはとても好評でした。

今後の展示会に望むテーマとしては、やはり幕末維新関係のものが人気を集め、次いで本館所蔵の特殊文庫について、そのほか美術関係や京都に関するものなどが要望されていました。

10月14日（金）には、人文科学研究所の佐々木克教授による講演「公武合体と尊皇攘夷運動」が本館AVホールで開かれ、一般市民ならびに教職員、学生で会場は満席となりました。

(2) 電子図書館システム（Ariadne）を利用した電子版展示会のデモでは、合計838名の入場者がありました。ここでは、展示会の内容（資料・人物解説、画像情報）を電子化して、電子図書館システムのメニューの一つとして提供すると共に、そのデモンストレーションを行いました。

電子図書館とは、デジタル化された公開可能な情報を、世界中のどこにあるかにかかわらず、オンラインで入手できるシステムです。

今回公開されたメニューは、「図書・論文検索」「世界の図書館」「催し物案内」「大学案内」などで、書誌情報ばかりでなく、画像情報や全文データにもアクセスできます。ハイパーテキスト化された展示会の内容も、画面上でリンクをたどって行く事によって、様々な順序で見に行くことができます。

興味を引いた機能として、多面的な検索ができる点、翻訳・朗読・読書支援（メモ、付箋）などの機能とその統合性、ネットワーク性（世界の図書館）などが挙げられていました。また、画像データベースやハイビジョン映像の鮮明さも関心を集めていました。

全体として、電子図書館システムの有意義性、将来性に期待がかけられる一方で、データベース構築作業や、アクセス可能性、著作権問題など、実用化に向けての困難を指摘する意見もありました。

（雑誌・特殊資料掛）